

研究題目：ベルクソン『物質と記憶』第四章の色覚論における思考実験の構成・改良の方法論についての研究

【研究の背景】

色とはどのような存在者なのか。日常的な経験においては、色は事物それ自体がもつものと見なされる。それに対して、科学においては、色は脳によって生み出された性質に他ならず、ひいては、事物それ自体がもつものではないと言われることがある。このように、色にかんする日常的な世界像と科学的な世界像のあいだにはギャップがある。このギャップをどう理解するのかということに、科学の理論が意識や世界のあり方を正確に反映しているのかという問題への回答が賭けられている。

色の実在論によれば、色は事物それ自体がもつものであり、日常的な世界像が支持されるべきである。それに対して、色の非実在論によれば、色は脳などの器官が生み出して、外界に投影する性質に他ならず、科学的な世界像が支持されるべきである。これらの回答は、日常的な世界像と科学的な世界像のどちらが正しいのかということについて、それらのうちの一方を否定して、他方を肯定するという形の議論に基づいている。

このように色の実在論と非実在論が「日常的な世界像か、それとも科学的な世界像か」という二者択一の論争という形をとっているのに対して、フランスの哲学者ベルクソンは独自の色覚論を展開したと言える。というのも、ベルクソンは、色にかんする日常的な世界像と科学的な世界像のどちらも正しいという両立論を展開したからである。つまり、ベルクソンは、色についての日常的な世界像と科学的な世界像のギャップを解消して、両者を一致させる方途を探求した。

【研究の目的と方法】

本研究の目的は、このベルクソンに独自の色覚論の内実を解明することを通して、日常的な経験と科学が提示する理論とのギャップを解消するヒントを得ることである。この目的を達成するために、ベルクソン『物質と記憶』の色覚論の議論を再構成することを通して、テキストの分析を試みた。また、現代の色覚論の諸立場を踏まえて、ベルクソンの理論がどのような特徴をもつのかということ、ならびに、その利点と欠点を明確にすることを試みた。

【研究の成果・結果】

研究の成果としては以下の二つの点を挙げることができる。

一つめは、ベルクソンが『物質と記憶』で展開した色の实在証明の議論を整理したことである。大まかに述べると、ベルクソンが、①記憶といった経験の内容を生み出す機能が脳や身体にないことを『物質と記憶』第二章以降で示していること、そして、この①を通じて、②色も含めた経験の内容一般を生成する機能を脳や身体がもたないことを示すという構成の議論を展開していることを示した。

二つめは、ベルクソンの色覚論を色の傾向性理論と比較したことである。『物質と記憶』には、一方で、色の非实在論を否定している箇所がある。他方で、事物それ自体が色を持つという实在論的な主張を述べているように見える箇所がある。しかし、『物質と記憶』にある色についての主張を詳細に分析すると、ベルクソンの色覚論は色の实在論よりも、色の傾向性理論に近いのではないか。このような解釈を提案し、その妥当性を評価するための論点整理を行なった。

【今後の研究の課題】

今後の研究課題としては以下の二つを挙げることができる。

一つめは、「脳は色を生み出すことができない」というベルクソンの主張の正当化の道筋をより具体的にすることである。脳が記憶の内容を生み出すことができないという主張それ自体の解明がベルクソンの色をめぐる理論の正当性を評価するのに重要であることがわかった。しかし、記憶という特定の事例において脳が表象を生み出していないという主張から、色などの表象一般において脳は表象を生み出していないという主張をベルクソンが導き出す道筋がまだはっきりと見えていない。今後は記憶論にも踏み込む形でベルクソンの論証をより詳細に整理していくこととしたい。

二つめは、色の傾向性理論とのより詳細な比較である。ベルクソンは色覚論を時間経験や記憶力との関係から説明するという独自の路線を進んでいる。本研究の期間では、時間や記憶といった論点を踏まえた場合において、ベルクソンの色覚論が傾向性理論とどのような点で類似ないし相違しているのかを明示するには至らなかった。今後は、時間経験論や記憶論を踏まえて、ベルクソンの色覚論のより明確な特徴づけを試みたい。